7 随筆

学習目標
- 随筆を読むときは、事実と感想を区別して内容を捉え、筆者の思いや主張を読み取ろう。
- 随所に見られる、筆者が工夫を凝らした表現を味わおう。

要点のまとめ

●随筆

随筆とは？ 自分の体験や見聞をもとに、感じたことや思ったことを、自由に書いた文章。 →事実と感想を読み分けることが大切。

事実の読み取り方

❶話題をつかむ…文章の冒頭で話題が示されていることが多い。

❷出来事を捉える…中心的に描かれている出来事や事柄を読み取る。

感想の読み取り方

❶筆者の感じ方や考え方が表れている部分を押さえる。

例 ▪直接感情を表す言葉……「うれしい」

▪筆者の考えを示す表現……「……と思う。」「……べきだ。」

▪情景描写……「空にはにわかに黒い雲が広がった。」→不安

❷表現が工夫されている部分を押さえる。 表現技法↓64ページ

例 ▪表現技法 ▪対比などの構成 ▪筆者独自の表現方法

比喩	直喩	「ようだ」などを使ってたとえる　例夢のような日々。
	隠喩	「ようだ」などを使わずにたとえる　例君は私の太陽だ。
	擬人法	人でないものを人にたとえる　例目覚まし時計が叫ぶ。
反復		同じ言葉を繰り返す　例よかった、よかった。
対句		意味等が対応するよう言葉を並べる　例春の桜と秋の紅葉。
体言止め		文末を体言（名詞）で結ぶ　例今朝咲いた一輪の花。
倒置		言葉の順序を通常の言い方と変える　例泣いた、大声で。

確認問題

●○● 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

例年だと夏の始まりには遠慮がある。どのぐらい照ったらよいのだろうかとの躊躇がお日様に感じられる。それまで雨雲のカーテンの向こうでぬくぬくしていたところを、突然人目に曝されてしまった戸惑いがある。うぶなのだ。だから梅雨前線に取り残されてしまった要領の悪い湿った空気の残党を炙って追いやることができない。てかりだした椿の葉の上でそれが一息吐いているのを見てみぬ振りする気の好さがある。

それが今年はどうだったろう。*貴船の水まつりが終わった途端、挨拶なしで真夏になった。陽光は叩きつけるように降り注ぐ。正に怒涛の勢いである。節電は誰もが心がけていた。出来るだけ辛抱した。我が家などあまりエアコンとのお付き合いがない方と思うが、それでもいつも以上に注意した。

(1) 内容理解 この文章でまず話題として取り上げているものは何ですか。次の□に当てはまる言葉を、文章中から二字で抜き出しなさい。

夏の□

ポイント 最初の二段落の内容に注目して、何について説明しているのかを読み取る。そのうえで、その周辺から空欄に当てはまる適切な言葉を捉える。

(2) 表現技法 □に用いられている表現技法を次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 体言止め　イ 直喩　ウ 対句
エ 隠喩　オ 擬人法

□　□

ポイント それぞれの表現技法の特徴を踏まえて、□部分にその特徴が見られるかを一つずつ確認する。

①茶の湯では季節を遮断しない。どのように手強い一日を迎えても、それと折り合いをつける道を探す。確かに猛暑だとそこから離れたくなる。しかし、茶室にはエアコンはない。扇風機もない。涼しくするのは難しい。但し、涼しく感じあう工夫がある。その工夫することが暑さとの折り合いをつける手立てなのだ。

たとえば七月や八月だと、細い*水指の蓋代わりに梶の葉や蓮の葉などを用いる*点前がある。葉の上には水滴を打つ。よく見ると席中に入り込む昼の日差しが水滴に閉じ込められ、ぷるぷる震えている。一瞬、暑さが遠のく。

工夫、と記してきたが、それは茶の湯の世界だけのものではない。誰でも出来るし、どこにでもある。面倒くさがらなければ、だが。

②スイカを思い浮かべていただきたい。夏の日に付き物のお八つだった。それがいつの間にか主役の座から下り、アイスクリームなどに取って代わられた。確かにお菓子類だと買うのは簡単で、始末も手軽だ。スイカはそうはいかない。冷やして切り分けなくては口に入らない。切り分けてあればそれでよいかというとそうでもない。スーパーなどで切り売りしてあるものからは既に涼味が失せている。

冷やした丸ごとのスイカを目の前に置く。なんとなくその頭を叩き、それから包丁の刃を差し込む。途中までいったらそこで割るように分ける。そのときパカッと音が立つ。そうして中から冷気が逃げてくる。それが顔をかすめるとき、瞬く間だが夏の昼下がりから刺々しさが消える。冷やし、切り分ける、という手間はかかるが、それだけの価値がある。

何でも手に入る世の中になった。だから私たちは贅沢になり我儘になった。心も体も動かさず、依頼ばかりするのに慣れきった己を戒め、たまには手の届くものでやりくりしてみては如何だろう。工夫することによって得られる満足感は、流通に乗って手元に届けられるものとは一味違う。そう私は思っている。

（注）貴船の水まつり＝京都にある貴船神社で、七月七日に行われるまつり。
水指＝茶道の道具。　点前＝茶をたてたりするときの作法。

（千宗室「工夫してみる」より）

(3) 表現理解 ——線①「茶の湯では季節を遮断しない。」とありますが、ここでの「遮断しない」と同じような意味の表現を、文章中から八字で抜き出しなさい。

ポイント 筆者独自の表現。「遮断」とは、「間を遮って、流れなどを止めること。」という意味。

(4) 内容理解 ——線②「スイカを思い浮かべていただきたい。」とありますが、文章中のスイカの説明として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 食べたいときに簡単に食べられて、始末も手軽な夏に付き物のお八つだ。
イ 自然の食物なので、アイスクリームのような人工物に比べて体によい。
ウ 食べるために手間がかかるが、その中に味わい深い涼味が感じられる。
エ もっと手軽に食べられるようになれば、お八つの主役に戻れるはずだ。

ポイント スイカが、アイスクリームと対比されていることを押さえる。どのような点がアイスクリームと異なるのかを読み取る。

(5) 文章の把握 筆者がこの文章で伝えようとしていることについてまとめた次の文の［A］・［B］に当てはまる言葉を、Aは二字、Bは三字で文章中からそれぞれ抜き出しなさい。

▪欲しいものを流通に頼るのではなく、手の届くもので［A］することによって、いつもとは一味違った［B］を得ることができる。

A［　　］　B［　　］

ポイント 筆者の考えを示す表現「……と思う。」などに注目して、筆者の感じたことや、考えたことを捉える。

演習問題

■□■ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

若い時から能率的というのでしょうか、時間の使い方が実にうまい人を知っています。二時間ずつ、ピアノ、英語、フランス語、お茶、お花、と、ひと通りの稽古ごとをみんなマスターし、外国へも留学して、出来ないものはないという才色兼備の見本のような人です。

みごとなものだなと思いますが、①私はどうもこの人についてゆけないところがあります。

例えば、もめごとを起(おこ)している夫婦がいます。この人は、すぐ、

「別れるべきよ。別れて新しい人生を踏み出しなさい」

と断言します。

私は、理屈はそうだけれど、人間なんてそう簡単に割り切れるものではない。のたうち廻(まわ)りながらでも、もうすこし考えてみたら、という意見で、いつもぶつかります。

彼女は私の書くものに対して、「ハッキリしない」といい、私は、彼女の生き方に、「正しいけれど味わいが乏(とぼ)しいのではないか」と思ってしまいます。

お茶を二時間習い、時計が三時になったから、すぐショパンが弾けるものでしょうか。私は非能率的といわれても、お茶を習った日はお茶だけにして、夜までその気分を大切にしたいと思う「たち」なのです。

いや、それよりも、「私は時間を合理的に使っているでしょ?」という、したり顔が——私は、ダメな人間ですから、きっと口惜しいんでしょうね——気に入らないのです。

時というものは、一秒一秒、時計のセコンドのようにせわしなく過ぎてゆくものでもありますが、一生の単位で見れば大きな河の流れにも似て、ゆったりと流れてゆくものでもあるはずです。

(1) 心情理解 ——線①「私はどうもこの人についてゆけないところがあります」について、次の各問いに答えなさい。

1 筆者は、この人の生き方について、どのような思いを抱いていますか。「……という思い。」に続くように、文章中から二十字以内で抜き出しなさい。

という思い。

ポイント ——線①の「この人」と筆者について、例として挙げられたもめごとを起こしている夫婦への対応の違いを押さえる。そのうえで、筆者は、相手のことをどう考えているのかを読み取る。

2 筆者は、「この人」の態度について、どのように感じていますか。「合理的」という言葉を使って、三十字以内で書きなさい。

ポイント 筆者が、この「時間の使い方が実にうまい人」に対する思いが述べられている部分に注目する。時間の使い方について、筆者自身は「気分を大切にしたいと思う『たち』」だと述べたうえで、「いや、それよりも……」と、相手に対する思いを述べている。指定語句の「合理的」が文章中ではどう使われているかも確認する。

(2) 心情理解 ——線②「私は、どちらかといえば負け犬が好きです。」とありますが、それはなぜですか。文章中の言葉を使って書きなさい。

三年五年を、無駄にすごしたとしても、六十年七十年の人生にとって、引っかき傷ほどにもなりません。

②私は、どちらかといえば負け犬が好きです。

人も犬も、一度ぐらい相手に食いつかれ、負けたことのある方が、思いやりがあって好きです。

時にしても同じです。

一時間単位、二時間単位で時間を使ったといっても、それはせいぜい、時計を有効に使ったということにすぎません。

人間は、時計を発明した瞬間から、能率的にはなりましたが、同時に③「時計の奴隷」になり下がったようにも思います。

時計は、絶対ではありません。

人間のつくったかりそめの約束です。

もっと大きな、「人生」「一生」という目に見えない大時計で、自分だけの時を計ってもいいのではないでしょうか。

若い時の、「ああ、今日一日、無駄にしてしまった」という絶望は、人生の大時計で計れば、ほんの一秒ほどの、素敵な時間です。

恐れと、むなしさを知らず、得意になって生きるより、それはずっとすばらしいことに思います。

どんな毎日にも、生きている限り「無駄」はないと思います。「焦り」「後悔」も、人間の貴重な栄養です。いつの日かそれが、「無駄」にならず「こやし」になる日が、「あか」にならず「こく」になる日が、必ずあると思います。真剣に暮してさえいれば——です。

〈向田邦子「夜中の薔薇」より〉

---

(1) 内容理解　②「私は、どちらかといえば負け犬が好きです。」とありますが、筆者がこのように捉えているのはなぜですか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人も犬も、一度ぐらい相手に食いつかれ、負けたことのある方が、思いやりがあって好きだから。

イ　時にしても同じで、一時間単位、二時間単位で時間を使ったといっても、それはせいぜい、時計を有効に使ったということにすぎないから。

ウ　人間は、時計を発明した瞬間から、能率的にはなりましたが、同時に「時計の奴隷」になり下がったようにも思うから。

エ　時計は、絶対ではありません。人間のつくったかりそめの約束だから。

ポイント　「負け犬」とは何かを押さえたうえで、筆者が「負け犬」をどのように捉えているのかを読み取る。

(2) 内容理解　——線③「『時計の奴隷』になり下がった」とは、どういうことですか。適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　時計以外の時間を失い、あらゆる楽しみが奪われていること。

イ　時計によって刻まれる時間に制御され、能率重視になっていること。

ウ　時計が刻む時間の大切さを忘れ、恐れとむなしさの中で生きていること。

エ　時計以外の時間に振りまわされ、能率が上がらなくなっていること。

ポイント　「時計の奴隷」という表現の意味する内容を捉える。「なり下がった」という否定的な表現が使われていることにも留意する。

(3) 主題　筆者がこの文章で伝えようとしていることとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　時間の使い方を考えることで、人生の無駄を減らすことができる。

イ　無駄のない生き方を過信しすぎると、思わぬ失敗をするものである。

ウ　無駄な時間を気にするより、栄養をとって健康に暮らすことが大切だ。

エ　一見無駄に見える人生が、むしろ人間の深みを増してくれるものだ。

ポイント　筆者の考えを表す「……と思う。」などの表現や、比喩的な表現の工夫に注目して、筆者が伝えようとしていることがまとめて述べられている部分を読み取る。

実戦問題

◆◇◆ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈愛知改〉

1 会社に勤めていた十五年の間で最も忘れがたい思い出を一つだけあげよ、といわれたなら、迷わずに語ることのできる一つの光景がある。それは工場に勤務していたころに出会ったある午後の場面であった。その工場で*軽四輪乗用車の試作が始められることになった。こぢんまりとした試作の*セクションが設けられ、そこでぼくは、試作関係の予算を取り扱う仕事を与えられた。検討の段階を過ぎて試作工事に着手したのだが、技術的な知識の乏しいこちらには、いくら図面を眺めてもどのような形のものがどんなふうに作られていくのかがのみこめない。いきなり乗用車の形をしたものを作るのではなく、その前にまず基本構造をおさえ、足まわり部分の機能を確かめるための実験用の台車を製造するのだ、と教えられた。工場の片隅の試作職場の*ピットの上になにやら奇妙な形のものが徐々に姿を現してきた。四つの車輪はついているのだが乗用車とはほど遠い、リヤカーがエンジンを積んでいるような骨組みだけの車だった。

2 ある日、ついにその台車が完成した。試作のためにはでな催しはできないが、それでもひっそりとした始走式が行われる運びとなった。工場の幹部と関連職場の者が見守る中で、ピットの上にのせられていた台車にエンジンがかけられ、ピットの両側につけられた鉄の台の上を車はゆるゆると動き出し、やがて傾斜を滑り降りるとそのまま曇り空の工場の外へよたよたと進み出た。走った、走った、と声をあげ、その場にいた作業服の人々が一斉に車の後を追って駆け出した。リヤカーとも大型の乳母車ともつかぬ、義理にも格好が良いなどとはいえぬ台車であったのだが、エンジンの甲高い音を放って懸命に塗装工場の前を走って行くそれを見ると、なんともいえぬ気持ちに襲われた。と同時に、車を追って思わずどっと駆け出した人々の動きが、まるで自分の血のように身体の中に脈打っているのを感じてもいた。それまでに経験したことのない、なにか大きな分厚いものに背後から押し包まれるのに似た感動をぼくは味わっていた。

3 流れの生産にはいる前の実験用の台車であり、新しい技術的な試みを積んだうまく走るか走らぬかわからぬような一台だけのあの車は、試作に携わったすべての人々にとっての自分の作品であったのかもしれない。そして振り返ってみると、ぼくが感動をさそわれたのは、あの①ぶざまでかれんな車の走る姿であるというより、むしろそれを追って一斉に駆け出した人々の大きな動きの方ではなかったか、と思われるのである。あるいは、車を追って駆け出す人々と、②ぼくがその動きを共有することができたための感動であったのかもしれない。

4 後になってから始走式の思い出話を職場でしていると、造船所で働いていたという中年のエンジニアが、船の*進水式というのはなぜかむしょうに涙が出て仕方がないものだ、と照れたように笑いながら話してくれた。彼にしても、もしたった一人で進水式をやったのだとしたらそれほど涙は流れなかったのではあるまいか。船という巨大なものを製造するのに参加した多くの人々と肩を並べて、おもむろに動き出す船体を見つめるからこそ、涙は*ぼうだと下ったのではなかったか。そこには一つの仕事に結ばれた人々の共感が重く渦巻いていたのに違いない。

5 多数の人々が集ってなにか一つのことを成し遂げた時、そこに感動の生まれるのはよくあることだ。優勝したスポーツチームの選手が泣くのは珍しくないし、力を合わせて準備した催し物が成功した時に胸が熱くなったりする経験はだれにも多少はあるだろう。けれど、労働の場における始走式や進水式の感動には、なにか③それ以上の重みがあるように思えてならない。進水式には参加した体験がないのでそちらの方はわからないが、少なくとも試作車の始走式などでは、よく映画やテレビドラマにでも出てきそうな場面、喜びの涙にくれて肩を抱き合ったり、固い握手を交わしたりする光景は見られない。ぼくの知る始走式では、人々はただ、走った、走った、と声をあげて試作台車を追っただけであり、あとは構内を遠ざかって行くその車の後ろ姿を腕を組んでじっと見つめているにとどまった。人々の示したのは一種寡黙な感動であった。それだけに重みが感じられた。口に出し、身体に現さずとも、心の内にあるものは自然にわかり合っているのだ、という暗黙の了解がお互いの間を満たしているかのようだった。

6　この重みは、感動の中心にあるのが労働であったからに違いない。特別の決意や際立った忍耐を必要とはしない、日常作業の目には見えぬ無限の積み上げが到達した成果には、日々の生活自身の重みがゆったりと詰め込まれていたのだろう。だから、始走式の場にいた人々は、天にも昇るような気持ちは抱かなかったかわりに、④しみじみと自らの仕事をかみしめていたに違いないのである。そしてかかる感動を大きく育てあげたのは、同じ思いが肩触れ合って立っている人々の中にも動いているのだ、といった連帯への静かな認識であったと思われる。

（黒井千次「働くということ」より）

（注）軽四輪乗用車＝軽自動車のこと。
セクション＝担当する仕事などによって分けた部門。
ピット＝自動車の整備や修理をするところ。
進水式＝新しく造った船を水上に浮かばせるときに行う儀式。
ぼうだと＝とめどなく流れ出るさま。

(1)　心情理解・表現理解　――線①「ぶざまでかれんな車」という言葉に込められた筆者の気持ちとして適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　喜び　　イ　謙そん　　ウ　落胆
エ　親しみ　　オ　称賛

□

(2)　心情理解・表現技法　――線②「その動きを共有することができた」とありますが、筆者がこのときに抱いた感覚を、直喩を用いて表した一文が文章中にあります。その一文を抜き出し、初めの四字を書きなさい。

□

(3)　心情理解　――線③「それ以上の重みがある」とありますが、筆者がこのように思った理由として適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　人々の心には、始走式を迎えてやっと単調な日常作業から解放されたという喜びのほかに、一つの仕事を成し遂げたという共感が渦巻いていたように感じられたから。
イ　人々の心には、みんなで力を合わせて完成させたという感動だけでなく、始走式は日々の労働の積み重ねによる成果だという共通の思いがあるように感じられたから。
ウ　喜びの涙を流して肩を抱き合ったり固い握手を交わしたりしなくても、人々には労働のつらさに耐えながら日々生活を送っているという連帯感があるように感じられたから。
エ　みんなでなにか一つのことを成し遂げたという感動はあっても、人々にはそれを口に出したり身体に現したりしてはいけないという暗黙の了解があるように感じられたから。

□

(4)　心情理解　――線④「しみじみと自らの仕事をかみしめていた」とありますが、このときの人々の心情を説明した次の文の□に当てはまる言葉を、2・3段落から五字で抜き出しなさい。

▪試作に関わったすべての人たちは、それぞれが完成した一台の台車を□として捉え、静かな喜びと達成感を覚えている。

□

ポイント

(1)　2段落の、完成した台車の描写に着目し、筆者が台車のどのような点を「ぶざま」「かれん」と感じているのかを捉え、表現に込められた筆者の気持ちを読み取る。
(2)・(3)　まず――線に含まれる指示語の指している内容を押さえ、そのうえで(2)は筆者の感じた内容、(3)は理由を示す表現を手がかりに解答の根拠となる箇所を文章中から読み取る。